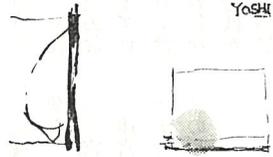


## 私の学生時代

YOSHI



田淵和彦

「学生時代の思い出」と題して原稿依頼を受けたので卒業年度を数えてみると、すでに十年もたっているのおどろいた。十年ひと昔というが、学生時代の思い出ももう昔のことになりそうである。

私は、中学、高校、大学と同志社一本の学校生活を送り、現在も同志社大学に職を奉じている。いま、この長い同志社在学時代をふりかえってみると、はつきり浮んでくるのは、やはりスポーツに明け暮れた哀歎の思い出ばかりである。もちろん学問の方も人並みに必要単位数は順調に消化はしたものの、これといった思い出もないまま、この方は割愛することにした。

「スポーツは愛好するがゆえに行なう」といわれるが、私の場合も幼ない時からスポー

ツは大好きであった。はじめはご多聞にもれず野球からはじまり、高校時代は一応、正投手をつとめるまでになった。しかし大学に進んでは、団体スポーツよりも、自分の努力と精進による体力や技術の成果が明確に発揮できる個人スポーツを選んで、自分の可能性の極限をきわめてみたいと考えだした。その頃、欧州各国のスポーツ事情を視察して帰ってきた父から、騎士道の名ごりをとどめ、優雅でしかもきびしさを持つ「フエンスング競技」をやってみてはといわれてさっそく体育会フエンスング部に入部したのであった。

当時、フエンスング部のコーチは、斯界の第一人者、牧真一氏（現日本フエンスング協会副会長）であり、私はここによく指導者を得て、恵まれたフエンスング生活に入ること

ができたのである。まず牧コーチからあたえられた目標は、オリンピック大会に参加することであった。そのためにはまず同志社のナンバー1となり、つづいて関西のトップに立ち、全日本の覇者となり、ユニバシアードに出場することである、と私は私なりに段階的な目標をつくりあげた。

やがて毎日の猛練習がはじまったが、一見楽そうにみえたこの競技もやってみると想像以上の厳しいものがあり、はじめのうちは慣れないせいもあって筋肉は痛み、各関節はガタガタになり、教室への階段の昇降にも一苦労したものであった。このように毎日クタクタになり、ビッコをひきながらも足はいつも道場に向っていた。次第にフエンスング競技に魅せられていったこともあるが、スポーツのフォームや技術は、長い月日にわたる苦しいトレーニングによって形成されるものであり、知的な理解のみでなく、むしろ筋肉の一つ一つに刻みこまれた肉体的記憶の積み重ねであることを教えられていたからである。

特に競技は、生と死とが隣りあった極限状態においての自己実現の闘いであり、自分の独自の才能を開拓しながら、他人の追従を許

さぬおのれの技術を創造していく争いなのである。したがって勝利者となるためには常に自分で自分を極限状態に追い込む努力を積み重ね、各種のトレーニング方法と策戦を創造しながら日常生活をこの極限の線にまで引きあげなければならない。

私は元来、中途半ばなことが嫌いな性格であり、何ごとでもやるからには徹底的にやらないと気がすまない。勝負するからにはかならず勝ち、競技会に出場するからには絶対に勝ち残ることを心に誓って練習した。そのためには、道場での練習量も他の部員の倍は行ない、帰宅後も夜の高野川や加茂川の堤を走り、庭先では、局部的なトレーニングに励んだ。ある日、父から「日本に雨は降らな



い」という言葉を教えられたことがある。これは今日、京都に雨が降ったとして練習を休めば、日本のどこかでは晴れて練習に励んでいる者があり、すでに一日の遅れをとるといふ意味である。練習につく練習と、一方、いかなる場に処しても不動の心構えを持つことも心がけねばならなかった。すなわち「劍禪一如」の心境への探求である。

こうした猛練習は、牧先生という最高の指導者と、家庭においては父の理解と励まし、特に私の体力保持のための栄養補給に献身的な努力をつくしてくれた母の愛情などと恵まれた環境の中に実を結び、私の幸運な剣の勝利はつづいていった。関西学生新入戦にはじまり、関西選手権大会、日本学生選手権大会、そして全日本選手権大会と優勝し、学生生活最後の夏は、イタリアのトリノ市で開催されたユニバシアード大会に日本代表選手として参加し、入場式には選ばれて栄ある日本選手団旗手として日章旗を手に行進したことは私の初の海外遠征の感激の思い出である。つづいて翌年、一九六〇年にはついに待望のローマ・オリンピック大会の代表選手に選ばれ、ようやく剣を手にして五年目に私の目的

は実現したのである。

ローマ大会、東京大会（四位入賞）とオリンピック大会二回、世界選手権大会六回、ユニバシアード大会三回、この他国際親善試合を含めて昨年までに世界約三十九ヶ国の国を訪れることができた。また、一九六二年から一九六四年の二年間は、フランス国立スポーツ研究所に留学して、ヨーロッパのスポーツ事情と本場フランスの剣技を学び、欧州各国のフェンサーと交流し、スポーツを通じて多くの友達を持つ機会ともなった。

こうして、二十歳台から得難い数々の体験を重ねられたのもひとえにスポーツのおかげであり、スポーツを愛し、スポーツに情熱をささげることが若者にのみ与えられた特権であり、しかもそれぞれのスポーツの場の経験からは、かずかずの貴重なものを学ぶこともできた。私は、こうして二度とめぐりくることのない青春を力一杯自分の体力と能力の極限に挑戦することに没頭したが、このスポーツに専心した学生時代のかずかずの思い出は現在においても悔なき貴重な体験として私の心を豊かにしてくれるのである。